

優秀賞

恐怖紹介人

さぬき市立さぬき北小学校六年 水口 真悠子

「あーあ、どこかに怖い本ないかなー。」
アヤカは怖い物、特に怖い本が好きだった。

「図書館の怖い本は読みつくしちゃったし、何処かに本屋あったっけな。」
と、ひとり言を言ったその時、ふと見た店で黒いスーツの女の人が手招きをしているのが見えた。店の名は『恐怖紹介』アヤカは変わった名前だなど思いついた。恐怖という二文字にひかれた。

「ちよつと見るくらいならいいよね。」
アヤカは自分にそう言い聞かせ、店の中に入った。店は照明も付いていなかったが、日の光が青いガラスの窓に当たり、店内を青く暗く照らしていた。

をお求めですか。」

女の人はこちらを見て言った。

「でも恐怖っていつでも、どんなものがあるんですか。ここ何も置いてませんけど。」

アヤカは疑問に思ったことを聞いた。

「いえ、ありますよ。ほら、そこに。」
女の人が指した先にある机には、先ほどまでなかった。紺色の本が置かれていた。

「ほんとで。さっきまではなかったのに。」

少し不思議に思いながらも、本を開いてみると、今までに読んだことのない物語がたくさんあった。ページをめくっていく中で、一つの題名が目にとまった。その題名は『約束の人形』。

どんな物語か読もうとした時、女の人の急に声をかけられた。

「お決まりですか。」

「あつ、はい。でもどうするんですか。」

「では本をお預かりしますね。」

女の人はそう言いつつアヤカから本を取り、アヤカに向けて開いた。やがてそのページは、うずを巻き始め、あたりからは風がふいてきた。その風はまるで、アヤカを本の中へ吸いこもうとしているようだった。

「あの、風が強くて、大丈夫なんですか。それと、ここお店の中なのに、なんで風がふいているんですか。」

「風は気にしないでください。それは本の世界をお楽しみください。いってらっしゃーい。」

すると、よりいっそう風が強くなり、アヤカは本の中へと吸いこまれてしまった。

「どこ、どこ、もしかして本の中なの。」
アヤカは不安なまま、しばらく暗闇をさまよっていた。その時だった。一筋

の光が見えた。光はだんだん広がっていき、アヤカを包んだ。目を開けると、そこは知らない景色だった。するとどこからか声が聞こえてきた。

紬は今日、誕生日。

紬が親に、「誕生日プレゼントは絶対人形」と言ってから、プレゼントは、必ず人形にしてくれた。

今回は、好きなアニメのキャラクター。

「あっこれ、本に書かれてたのだ。」
そう言おうとしたが、声ははず、それどころか勝手に口が動き、しゃべり出した。

「ずうつといっしょ。大事にするね。」
そう言っ、勝手に体も動き、人形をだきしめる。そしてまた声が聞こえてくる。

「ずうつといっしょ。大事にするね」
は紬のお決まり文句。しかし、それは口だけ、遊んではすぐあきて、ほったらかし。

「ずうつといっしょ。大事にするね。」
次の子も、また次の子も、同じことを言っってはほったらかし。

とうとう、紬の夢の中に人形が出てきた。景色は、紬の夢の中のようなだった。あたりは暗く、人形の目だけがらんと光っている。

やがて人形は浮かび始め、紬のもとまで来てしまった。

「私は二日だった。」

「ぼくは十時間も大事になんてしてくれなかった。」

そして、人形たちは口をそろえて言った。

「ずっと大事にしてくれるって約束したのに。紬なんて人形になってしまえ。」

次の日、紬の母が呼びにくると、そこに紬の姿はなく、紬によく似た人形だけがあつた。

そのころ、本の外では紹介人が考えを練っていた。

「怖い話、減ってきましたわ。そうだ、アヤカさんにも新しい物語を作ってもらいましょう。アヤカさん、どんな物語を作ってくれるのでしょうかね。アヤカさん。本の中でがんばってくださいね。」

紹介人はそう本へ呼びかけると、本を閉じてしまった。そして、その紺色の本を持って、うすい暗闇の中へと消えていった。どうやら最近、子どもが街から消えているらしい。

「もしかして、あの子が消えたのって恐怖紹介人がやったんじゃない。」

「同じ学年のあの子も…。」

子どもの間では、恐怖紹介人が子どもを消したんじゃないかというウワサが少しずつ、広がっていった。

「いらつしやいませ。どのような恐怖をお求めですか。」

紹介人はやってきた子どもに、紺色の本を手渡した。そして、その子は書かれた物語を読む。本へと閉じこめられた子ども達が作った、見たこともないような物語を。